

2003年(H15)

# 在京芸陽



廣島二中・観音芸陽会

# 観音高サッカー全国大会出場を果たす！

四年連続県ベスト4、インターハイでは準優勝と今一步の好位置にいた観音高校サッカー部が、今年は県チャンピオン、中国地区代表として、念願だった全国大会出場を果たした。同窓会会長、OB会会長の連名で応援募金活動の趣意書が各地区の同窓会事務局に送付された。(下)

01390=5=2659 「広島観音高校サッカー部OB会特別会計」宛  
大会は10月13日まで、納入締切りが10月4日とあっては本誌発行の10月10日には間に合わないが、全国制覇を目ざして堂々と闘って欲しいものである。



## 広島県立広島観音高等学校サッカー部 高円宮杯全日本ユース選手権出場募金趣意書

平素は本校教育発展のため、格別のご協力とご支援を賜り厚くお礼申し上げます。

この度、本校サッカー部は三月から七月まで行われました中国地域プリンスリーグAグループにおいて一位となり、九月二十七日より、十月十三日まで開催されます高円宮杯全日本ユース選手権、中国地区代表の榮譽を得ました。

サッカー部創設以来の念願でありました全国大会に出場し、堂々と広島観音高校としてのプレーを望むところでございます。

さて、出場に際しまして応援費などの多額の経費を要し、その捻出に苦慮いたしております。このため、本校同窓会、サッカー部OB会では共同で広島県立広島観音高等学校サッカー部高円宮杯全日本ユース選手権出場の募金活動を行うことになりました。つきましては、関係各位におかれましては出費多端の折とは存じますが、格別のご理解と温かいご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成十五年九月

同窓会会長 寺本和彦  
OB会会長 加藤英海

各位

記

一、募金額 個人一口 一千元(何口でも可、なるべく多くの口数を期待します。)

法人一口 一万円(一口未満も可)

二、納入締切日 十月四日 なるべく早めの納入をお願いいたします。

三、納入方法 直接お渡しいただくか、振込用紙(郵便局専用)をご利用ください。

### 払込取扱票

00											
口座記号番号											
0	1	3	9	0	5			2	6	5	9
金額											
加入者名											
広島観音高校サッカー部 OB会特別会計											
料金											
特殊取扱											
各票の※印欄は、											
通											

芸陽観音同窓会 昭・平 年卒業

切り取り

〔在京芸陽〕 目次

平成十五年（二〇〇三）十月十日発行

表紙裏 特報 観音高校サッカー全国大会出場	西亀 達夫	2
在京芸陽会総会に寄せて	西亀 達夫	2
平成十四年在京芸陽会グラフ		4
在京芸陽会発足以来16年を1頁に凝縮		6
〈同期会だより〉二中18回	内村佐武郎	7
二中21回	奥窪 五郎	8
観音3回	山木 和雄	8
観音20回	松本 直和	9
芸陽・観音ゴルフ会	山木 和雄	10
ホール・イン・ワン	三宅 紳童	11
叙勲三人目誕生Ⅱ勲四等に輝く海の男たち		12
―私の奇術人生―	川崎 利秋	14
ハーモニカとの出会い	井原 義量	16
フィリピンで第二の人生を謳歌する秦 光俊氏		18
被爆者運動に献身する在京同窓		20
県人会でミニ芸陽会：グラフ		22
航空業界の大物も同窓だったⅡ日航の船曳氏		24
皇太子に麻雀の貸しがある？ 故谷口 清氏		26
〔追悼〕 故永井 要、徳田浩三氏		28
あとがき	裏表紙裏	



菊 油壺 陶 明治時代 倉橋藤治郎氏藏

# 在京芸陽会総会に寄せて



在京芸陽会

会長

西亀

達夫

(二中9回卒)

## 「はじめに」

広島二中や芸陽・観音高校の卒業生で関東地方在住者は、昭和六十二年以来毎年懇親会を開いて友好を深めています。戦後の学制改革の影響などもあって、同窓会としてはまだまだ拡充発展の余地があるように感じられます。

一昨昨年この会の会長をしておられた二中1回の高橋伝之助さんが亡くなられて、私はその後を受けて会長を勤めさせて戴いている西亀達夫(二中9回)ですが、この会でも会報に類するものを出してはという話もありますので、ご参考までにこの会の初めのころのことを簡単に紹介させて戴きましょう。

## 「関東同窓会について」

「もはや戦後ではない」と言われた昭和三十五年頃、旧制広島高等学校の卒業生で関東地区在住の人達がゴルフの会を開かれたようです。たまたま昭和五十年に初めの勤めを終わって建設会社に入った私も社長の勧めで六〇の手習いでゴルフを始めたものですから、高校の先輩のお誘いで昭和五十七年頃からその会に入れてもらいました。そこでは年に4回プレーをしていたのですが、あ

るとき先輩の大野慶治さん(二中5回)から高校のゴルフ会の一週間前に二中の卒業生だけで予行演習をしようと言われ、私もそれに入れてもらいました。そのうち二中の卒業生なら広高に限らず、たとえば士官学校とか大学予科に進んだ人も多いのだから入ってもらったらということになり、昭和六十年十一月十五日広島ゴルフ会のちょうど一週間前に、大野さんご夫妻や当時都留CCの社長をしておられた大槻光雄さん(広高14年卒で二中にも一時おられたことのある方)も入られて、拡大芸陽ゴルフ会の第1回が開かれました。場所は勿論都留CCです。そんな形で回を重ねるうち、それは単なる予行演習ではなくて同窓会のゴルフ部のような気分になって来たのは当然の成り行きでしょう。そして二中は学制改革で芸陽・観音高校に受け継がれたのだからそちらの人にも声をかけようということになり、いろいろと人脈をたどって徐々にではあります。各クラスの幹事さんに集まってもらい、ついに昭和六十二年十一月二十六日に関東地区の広島二中・芸陽・観音高校の同窓会の第1回の総会と懇親会が谷口清さん(二中9回)の紹介で永楽クラブで開かれ、その後、場所は日本青年館に変わりましたが、今年で17回を迎えました。その間事務局を担当してもらった奥窪五郎さん(二中21)をはじめ多くの幹事さんの大変な努力があったことは忘れることが出来ません。

## 「ゴルフ部会について」

ここで再びゴルフ部会の話に移りますと、上記のような関係でゴルフはいつも都留CCで行われていました。また、二中15回の田中正己さんが外人記者クラブのセクレタリーをしていて、その中のゴルフ会に大正会という名をつけて二中の出身者を多数入れたりと、また新宿から都留カントリーまでのバスの手配などして便宜を図っていることが、ゴルフ部会の発展に大いに貢献していると思います。都留CCが関東地区としては西になるので、名古屋から田所靖男さん(二中18回)ご夫妻、山梨から山田康彦さん(二中22回)等がよく参加されました。そのうち昭和六十三年三月十五日、名門相模CCの有力メンバーだった脇本繁喜さん(二中3回)のご紹介で同所で芸陽ゴルフ会を開きました。ここは由緒あるゴルフ場で、皆さんの評判も良かったので、結局脇本さんが亡くなられるまで9回もプレーさせてもらいました。そのうちに私もだいぶん年を



取って疲れてきたので会の世話役を秦 光俊さん(二中21回)に替わってもらい、ゴルフ場も倉本 馨さん(二中15回)のご紹介で、武蔵CCの豊岡や笹井コースでしばしば開かせてもらいました。そのうち秦さんが一年の大部分をフィリピンで過ごされるようになったので、世話役を三宅神童さん(二中18回)に替わってもらい、場所も飯能GCを使用させてもらうようになりました。

そのうちゴルフ場が西に偏り過ぎていくという批判も出ましたので、石丸恵照さん(二中22回)のご紹介で千葉CCの野田や梅郷コース、また大利根CCでもプレーを楽しみました。それは平成十一年頃のことです、その頃から芸陽・観音高校の方達の参加も次第に増してきたので、平成十三年五月八日都留CC

で開いた会で世話役を山木和雄さん(観音3回)に替わってもらいました。それ以来年4回のペースでゴルフ会が続けられています。

芸陽ゴルフ会では、いつも優勝者に対し、二中22回の松本 正さんからユーモアあふれる賞状が出されて、会を一層楽しいものになっています。

## 「再び関東同窓会について」

昭和六十二年の第1回の出席者は百十八名でしたが、その後減り気味のところを各年次の幹事さんの大変な努力で、特に観音9回の滝山 昇さんや20回の松本直和さんが同期の人を多数連れて参加され、昨年度の16回大会で初めて二中の卒業生よりも観音高校の方が多くなりました。

この会ではビンゴゲームをしたり、二中17回の川崎利秋さんのマジック等を楽しんでいます。会員の中には色々な趣味の人も多い事ですから、そのような人達の部会が生まれて紙面による交際が始まったら、尚一層良いのではないのでしょうか。

ご承知のように今年観音高校のサッカー部が「高田宮杯全日本ユース選手権大会」で中国地区で優勝して、全国大会に出ることになりました。このようなことも平素から紙面で伝わっていると尚一層愛着が湧くのではないのでしょうか。

【上の写真】

時には富士山が横顔を見せる  
都留カントリーにて '94.4

西亀 達夫  
にしき たつお

1917 福岡県で生まれる

1941 東京帝大工学部土木工学科卒業、  
鉄道省入省。陸軍に応召、各地を転戦、  
戦後運輸省に復帰。

本省より国鉄の工務局関係の要職を歴任、  
鉄道技術研究所所長で退官。

工学博士(東大)、東京工大講師。  
不動産建設専務、日本高速鉄道技術  
社長等を経て、現在、鉄道技術研究を  
一般に広める研友社名誉会長。

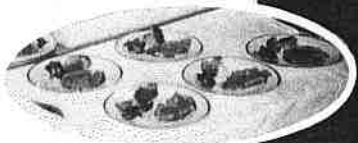
平成元年勲三等叙勲。

父君・故正夫先生は広島二中で地歴を  
担当、教頭も務め昭和12年に退職。



# "02平成14年 在京芸陽会グラフ

昨年10月11日に催された在京芸陽会の報告は同会本部発行の「藝陽」(11月9日)に掲載したので本誌での重複は避け、それに使った1枚(校歌の場)を含め、当日の雰囲気を出せるショットを披露します。説明は敢えて付けません。(本誌・松本)





# 在京芸陽会 発足以来 16年を1頁に凝縮

過去16回の総会を本誌ドクダシとヘンケンで1頁に凝縮してみました。とてもじゃないが読みにくい。でも、よろしかったら… 敬称略のご無礼平にご容赦。

【第1回】“87・(昭和62年)11・26 大野 永楽クラブ 約120名  
明治の鹿鳴館もかくやと思わせる立派なホールで産声。  
司会・奥窪五郎(21)開会の辞・大野慶治(25)、挨拶・永井要  
(24)、乾杯・高橋伝之助(21)(わかたけ)、梶山三郎(22)ピア  
ノで校歌、万歳・原 剛中(26)、閉会の辞・谷口 清(29)。  
写真はマツモト作のゼッケンをつけて各期別に。帰り際に誰  
かが「アリガトウ！」同窓会歴史に特筆される集いとなった。

【第2回】“88・(昭和63年)10・22 永楽クラブ 約100名  
会長に高橋伝之助(21)選出。故升田先生のご家族も出席。  
出張から成田帰国で間に合わなかった大吞 滋(22)の代わり  
に、浜岡平一(25)が「将来に繋がります」と宣言。  
第1回のギゴチなさがとれてグッとくだけてきた。

【第3回】“89・(昭和64年)10・27 永楽クラブ 約100名  
長谷川正也(25)「3回を重ねてどうやら定着の感あり」  
欠席の会長に代わり同期の竹林信夫「われら80歳に続け！」  
とハッピー。乾杯・脇本繁喜。渡辺慶三(20)の顔で歌舞伎町  
から4人の美女が出張サービス。元三菱の落合一郎(416)手  
配のモニターで松本撮影の「二中原爆慰霊祭ビデオ」を上映  
したが、雰囲気は負けて成功とはいえなかった。  
高松敏夫(25)「観音に繋がるよう努力したい」と閉会の辞。

【第4回】“90・(昭和65年)9・21 日本青年館 約100名  
永楽クのビル改築に伴い、岡本文夫(215)の肝入りで日本  
青年館に定席を移す。舞台看板を【毎年使えるもの】にマツ  
モト・デザインが新装。奥窪司会から「長話はしないで」と  
釘をさされた高橋会長渋い顔ながら歌舞伎町の美女たちにニ  
ンマリ。アトラクションに田辺鶴女の獅子舞。4度重ねて先  
輩後輩の交流に実りが感じられるようになった。

【第5回】“91・(昭和66年)9・28 日本青年館 約80名  
対ヤクルト戦で神宮球場に乗り込んだカーブに帯同してき  
たNHK広島テレビが、近くに郷土出身者の集まりがあると  
嗅ぎつけて飛び込み取材、カメラとマイクを向けられた同窓  
各々が思い入れを語り、奥窪「カーブ頑張れエイエイオー」  
に全員唱和、後日広島ローカルから「浩二赤ヘル初Vへ」特  
番に挿入放映された。図らずも大同結成5周年記念？

【第6回】“92・(昭和67年)9・25 日本青年館 約100名  
同窓会本部から今中龍雄会長、実務の寺本和彦幹事長、事  
務局から福川先生の3人を招き、母校創立70周年を祝った。  
初めて両校旗を飾る。全員の集合写真を撮ったのも初めて。  
今中、寺本両重鎮は口々に観音を弟妹と思つて繋いで欲しい  
と訴えた。福引の一等松茸が今中会長に当たり、奥窪「広島  
に帰る人じゃあげん！」に大笑い。 全員写真↓



【第7回】“93・(昭和68年)9・24 日本青年館 約70名  
前회가創立70周年記念と気張ったので、今回は落ち着いた  
集いとなったか。川崎マジック、梶山アコーディオンの健在

は嬉しいが、大野、脇本、原、といった会をこよなく愛した  
先達方の冥福を祈る場ともなった。

【第8回】“94・(昭和69年)9・30 日本青年館 約60名  
前回から取り入れた会費前払い制か、時期が重なったアジ  
ア大会の影響か、大盛会とはいかなかったようだが、ユック  
リ話が出来た、ご馳走が余って勿体なかった… とかの声。

【第9回】“95・(昭和70年)9・22 日本青年館 約60名  
特筆する変化はないが、高橋会長をはじめ年次を超えた同  
窓がお互いの息災を祝いあった。中には同期会にも顔をさ  
さない奴が出席して驚かせる例もあった。この頃から在京広島  
県人会新年総会の席でミニ芸陽会の呈が見られはじめている。

【第10回】“96・(昭和71年)9・21 日本青年館 約60名  
新任の寺本同窓会長が10周年を祝って広島から出席、翌  
日が観音の体育祭ということで止むなく単身日帰りという慌  
ただしさだった。この集いは本部発行「藝陽」新体制発足記  
念号で詳しく報告された。爾後この掲載も恒例となる。

【第11回】“97・(昭和72年)9・20 日本青年館 約60名  
寺田泰民という観音40期の若い仲間の初参加で、広島に続  
いて東京でも二中一観音同窓の合同という夢が実現への一歩  
を踏み出した。竹内昌士(223)が「二中の校歌を作詞した山  
本良雄は私の義父です」と名乗り出て満場のどよめきを誘っ  
た。「藝陽」に前年同様松本、さらに初参加の寺田も寄稿。

【第12回】“98 昭和73年 10・2 日本青年館 約60名  
観音卒業生の参加が本格的になるのを機に正式には「広島  
二中観音芸陽会」略称「在京芸陽会」と呼び名を改めた。本  
誌松本は看板に観音校章を加えるなどの準備はしたものの、  
被爆者一泊ツアーのビデオ制作とかち合ったので、苦渋の選  
択で欠席、本部「藝陽」への報告を奥窪事務局長に委託した。

【第13回】“99・(昭和74年)10・15 日本青年館 約60名  
発足当初は「二中のみで…」と言っていた高橋会長が、  
91歳までの長寿の秘訣を披露。観音組の代表格・山木和雄  
(43)、総会には夫人同伴という頼もしい肩入れ、観音高校ブ  
ラスバンドのテープを流して全員で歌う。出席者の3分の1  
を観音組が占めるようになって、この会も前途洋々。

【第14回】“00・昭和75年 10・11 日本青年館 約70名  
高橋会長の死去にともなって西亀達夫(29)新会長の誕生。  
ここ東洋軒の席は基本的には立食だから椅子は少ない。同期  
だけで10名以上という大デレゲーションを代表して挨拶し  
た瀧山 昇(49)「還暦の身では立ちん坊は些かくたびれた」

【第15回】“01・昭和76年 10・12 日本青年館 約70名  
竹林乾杯に後輩気押される。美女後輩のヘルプを得て川崎  
マジックご満悦。 井原義量(216)のハーモニカに合わせて  
「ああ厳島」“在京二中観音ガッチリ”と「藝陽」で報告。

【第16回】“02・昭和77年 10・11 日本青年館 約70名  
当然というか、遂にというか、初めて観音組の方が二中組  
を数において凌駕した。「藝陽」見出しに寺田泰民(440)母  
校HPから歌詞を取り出して全員に歌わせるというお手柄。



# 同期会だより

## 伊東温泉が定席です

— 広島二中18回生近況報告 —

18回生

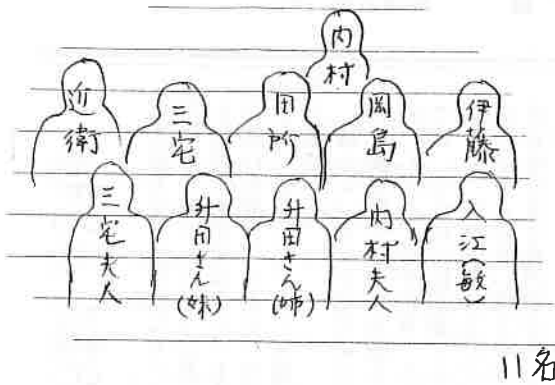
内村 佐武郎



私共広島二中18回卒業生の首都圏及び近県在住のメンバーで、平成15年8月現在音信可能者は20名となっています。

これまで毎年約一回、都内等でクラス会同期会を続けて来ていましたが、このところ加令のせいか出席者は年々減少傾向となって居り、これも止むを得ないことと感じている次第です。

こゝ数年は入江(一号)君の肝いりで伊豆伊東温泉の海風亭えびな(入江君が会長)で一泊して日頃の汗を流し、美味しいご馳走を満喫しながら楽しく歓談し旧交を温めて来ました。



今年四月七日〜八日、同封写真(上掲)にある

ように升田先生のお嬢さん姉妹と同伴者を含め11名の参加でした。直前になり金秋民雄君が急用のため、田中豊久君が膝を痛めて二人が欠席となり残念でした。

私達も喜寿を迎える年令となり、健康には相当自信があった連中もあちこち故障が出て思うように動き廻れない始末となって来ました。これからは余り背伸びすることなく、分相応に体力と相談しながら楽しく余生を過ごせれば、と願っているところです。終わりに諸先輩の方々はじめ芸陽観音同窓の皆様はじめご家族の皆様のご健勝ご多幸を心よりご祈念申し上げます。

八月三十一日

「本誌註」升田先生とはこの期の学級主任だった升田竜一先生(国語II故)。奥様とお嬢様は昭和六十三年の在京芸陽会第2回にこの18回生から招かれて出席、福引賞品をお嬢さんから渡されて相好を崩した同窓も多かったです。

— 内村迫伸 —

18回生で三年前位までクラス会にはよく顔を出してくれておりましたメンバー中、左記の2名が故人となられました。心より哀悼の意を表したいと存じます。



青梅市在住

入江 弘道 君

(平成13年9月8日 没)

横浜市港南区在住

長尾 真也 君

(平成15年7月16日 没)

合 掌

# 同期会だより

## 二中21回生在京同期会



6月23日新宿歓粋亭に於て9名の参加を得て開催した 時々会うことの出来る友、10数年ぶりに参加をした友、第一線を退き 夫々に健康状態には気を使い、職場を離れ墓場に行く途中の遊び場を十分に楽しく過ごすために、或る者は趣味の焼物に凝り、或る者は囲碁、遅巻きながらの勉強に又、これまでの恩返しとばかり世間のお世話役を任じる者千差万別なれど、等しく二中時代をともに過ごした少年期の話に瞳を輝かせながら、こうした集いに参加出来ることを喜び再会を約し散会した

出席者 石田治正・小田盛斗・加藤史昭・小川海平・北中康彦・  
北村裕昭・辻 輝弥・楨島 誠・ 奥窪五郎(記)

## ネギの会、古稀の旅と東京同級交歓会

「人生七十、古来稀なり」。中国の詩人杜甫が七言律詩で謳ったという古稀は、決して目出たい事を告げたものではない。七十才迄生きられる程の馬鹿はまず居ないから、今のうちに遊興の限りを尽して置くが良いとした極めて退廃的なものだった様である。

確かに、我々が幼児期に見慣れたオジイちゃん、腰が曲り縁側で昼寝をしていたイメージが強い。しかし、今や世界一の長寿大国となった日本では、七十台は壮年期の中に数えても良いかも知れない。我々も気持ちだけは、未だ一人前、若者に引けをとらないぞといったところがある。私の最も敬愛する藤沢周平氏が小説「三屋清左衛門残日録」にテーマとして引用する「日残りに昏る、に未だ遠し」といった心境である。

さて、草野球仲間の親睦会から出発したネギの会も、三回の旅行会を行い、節目となる古稀には、元気に海外の地で日頃鍛えた熟年パワーを発揮しようというのが皆の合言葉であった。しかし昨今のテロ等、不穏な海外の情勢から急遽取り止め、変貌著しい東京での集いとなった。即ち、のんびりと古い箱根の湯に浸って人生のアカを落とし、秋の夜長を虫の音と戯れ、静かな湖畔で将来を見つめ直す。そして翌日は関東在住の観音同級生と、初の交歓会を開くプランである。

二〇〇二年十月十七日の夕刻、ネギの会メンバーの約半数が、広島・関西・関東の各地から箱根の宿に集結、にぎやかに古稀の会が始まった。はるばる奈良から駆けつけたN君、兵庫のKさん、地元神奈川のI君、準幹事役となって貰った東京のYさんの四人の初参加により、宴は一層の盛り上がりを見せた。カラオケの二次会にも全員が出席という盛況ぶりであった。夜の宴だけ参加の予定だったI君が、別れを惜しんで翌日の遊覧旅行に同行を決め、朝早く雨と霧を見舞った秋の空も我々の旅立ちを祝すかの様に午後からはすっかり晴れ上り快い散策の一日となった。ロマンスカーで東京に向かった一行は、新宿のサザンタワーホ

観音3回生

山木

和雄



テルに舞台を移し、在京生の到来に胸をトキめかした。

十月十八日午後六時、一大セレモニーの幕が開かれた。総勢24名(写真)の古稀同級交歓会は各人の五十年ぶり再会の思いを込めた3分間スピーチで始まり、終始楽しい雰囲気の下、我々に時の経過を忘れさせた。各々の風貌、頭髮は変

れども、共に薫陶を受け苦節の時を過ぎた観音スピリットは健在であった。皆の明日への意気は高く、秋の夜長は盡きせぬ思いで和やかに更け、七年後となる喜寿の再会を約して終宴となった。

【出席者氏名】(敬称略。総計25名)

以上

(在京) 森政忠雄、渡部 剛、堂元一男、平塚 功、和田豊美、高田昭一郎、石井貞夫(前巻)、大谷末子、磯崎英子、山本豊子。(ネギの会) 横田修治、伊藤元治、茨木幹夫、小川清水、嶋田謙群、坪井 崇、増田秀雄、永井賢三、西尾敏子、加藤紀子、藤永正代、柴村政子、榎田美保子、矢沢朝乃、山木和雄。

## 二中22回期 今度は江ノ電、鎌倉

毎回、奥方や会友などゲスト歓迎で屋形船やら温泉一泊など趣向を凝らす二中22期「東京二三会」昨年は筑波宇宙センター見学バスツアーを行ったが、今年は10月17日、解説者付きで江ノ電に乗り、秋の鎌倉を逍遥する。参加予定は目下20名。

# 時間延長もして盛り上がる

## = 観音 20 回在京組同期会 =



世話役 **松本 直和**

(富士通株式会社勤務 / 上写真右端)

[本誌への書簡]

寒さの中にも春の足音が聞こえはじめた2月22日、渋谷区『おまかせ亭』にて観音20回在京組の同期会を開催致しました。22名(参加希望者は23名でしたが風邪の為1名欠席となり偶然にも開催日と同じ人数となりました)の参加を頂きました。以前にもクラス会は細々とやっていたそうですが、学年全体で集まったのは卒業以来初めてで、卒業以来の出会いの方もかなりいらした様です。

参加者は女性が16名、男性6名の構成で、案内状を出した方からの口コミ連絡で参加された方も数人いらっしゃり、彼女たちの草の根連絡の強さを感じました。男はどちらかと言えば仕事のつながりになってしまいます。

会のほうは大変に盛り上がりまして、当初2時間の予定でしたが、店の好意もあって、さらに2時間延長となりました。我々の時代は親が転勤族が多かったこともあって、卒業と同時に、そのあとで県外に出ていった者も多く、また我々自体も転勤族ですので積もる思い出話は尽きなかったようです。

本部制作の『藝陽』と22回期の『二二会報』は参加の皆さんにお配りしました。在京の同窓会活動についても認識を新たにさせていただいたようです。

十月の二中観音芸陽会の時には同時に観音20回同期会の開催もしたいと思います。

(3月3日・発翰)

[2/22出席者]

田中義一、高橋昭子(永野)、串山絹恵(三村)、松原邦雄、升野和江(田村)、猪原陽子(浜口)、志和木 薫、掛水通子(千葉)、安岡千寿子(泉)、佐藤洋子(香川)、山本由美子、小豆原博子、横山貴美子、升田和一、富岡和隆、江草登喜子、倉成由美子、藤原美岐子(土石川)、岩瀬清子(山領)、山田京子(徳永)、田中清美(影山)、小野ようこ、そして、松本直和。



# 関東地区・芸陽観音ゴルフ会

2003年度（平成14年10月～15年9月）のゴルフ会は、準名門クラスの割安なゴルフ場を厳選し若い層への呼びかけを計りましたが、成果は今一つでした。今後は休日のコンペも企画し現職の方々のご参加も得たいと思っています。本同窓会誌を軸に広く参加をお勧めしますので、よろしくお願ひします。

新ハンディ（出場3回以上）がほぼ定着した今年度のゴルフ成績は下記の通りとなりました。前回迄のグランドチャンピオンに代る優勝者3名によるカップ取切り戦は、接戦を制して三宅紳童（中18回）氏が栄冠を手になされました。日頃から年令のハンディをものともせずエイジシュートを目指し修練を絶やされぬ姿には、頭が下がります。（写真 左頁）

次年度も11月11日の太平洋アソシエイト江南コースを皮切りに5月と9月、東西の名門コースを計画しています。初戦となる太平洋江南コースは、近々女子プロ戦が実施される景観のすばらしいフラットな名コースで、大正会と合同コンペとなりますが、観音若手数名の申し込みもあり、老若男女による和気あいの集いが期待されています。

皆様のチャレンジ、お申し込みをお待ちしています。

連絡世話係 観音3回 山木 和彦  
TEL& FAX 03-3323-2108

## 2003年度コンペ成績 (ハンディ戦)

	月日	コース	優勝	2位	3位	ベストグロス
第1	H14/11・11	飯能グレン	山木(観3)	川崎(中17)	榎田(中20)	山木(観3) 93
第2	H15/ 3・25	大宮G	三宅(中18)	石丸(中22)	貞広(観4)	三宅(中18) 90
第3	H15/ 5・20	総成	佐々木(中25)	山木(観3)	渡部(観3)	佐々木(中25) 90
第4	H15/ 9・10	泉	川崎(中17)	三宅(中18)	山木(観3)	三宅(中18) 91



第4回泉カントリーで優勝し賞状を手にする川崎利秋さん（中17）



都留カントリーでスタート前の記念写真1例  
( '01・05・07 )



この写真、ここにあるからといって、ホール・イン・ワンの時のものではありません。右頁にあるカップ取切り戦を制して栄冠を手にした三宅さんの雄姿です

# ホール・イン・ワン

三宅

紳童

(二二中18回)

去る八月二十三日、松本さんより電話があり、今度芸陽観音の会報を出すにあたってゴルフについて一筆書けとの事でした。これは私が芸陽観音ゴルフ部会で数回優勝をしているので、この依頼があったのだと思います。

私がゴルフを始めたのは昭和三十三年六月十日でした。今年で四十五年にもなりますか。現在でも月二〜三回はコースへ行きます。

さてゴルフについて書けると云われると、思い出す

のが今迄に一度だけ経験をした事のあるホール・イン・ワンです。

それは昭和五十九年一月七日の事でした。コースは静岡県のファイブ・ハンドレッド・クラブです。

当日前八時集合、寒い朝でしたが、天気は快晴で八時半、一番のスタートと記憶しています。

その日のメンバーは、当コースの副理事長である

川田 昭氏(当時東急建設の副社長)、八重川三郎氏(当時住友建設の専務取締役)、橋爪健輔氏(当時日本国土開発の専務取締役)、そして私の四人で

快調なスタートを切りました。

順調に進んで行きます。遂に問題の十六番ホールへやって来ました。ここはショートホールで長さは一八六ヤード。打順は一番が川田氏、二番が八重川氏、私が三番手でクラブはクリークでした。

私が打った球がピンに向かって一直線に飛んで行きました。キャディーさんが「今のは入ったかも知れない。又はピンの後ろへ止まったか、よく見えない」と云うので、皆で走ってグリーンへ行ったところ、ホール・イン・ワンを達成していたのです。

私は唯茫然としてピンの中を見ておりましたら皆が早くボールを取り出せと云うので初めて我に帰り、ボールを取り出しました。

当日は副理事長と一緒にだったのでコースの従業員一同が玄関前で「おめでとうご座居ます」と声をかけて呉れ、いそいそと家路に着いたのでした。

今後は一度でよいからエージシューターをやってみたいと思い、ゴルフに励んでおります。

最後になりましたが、芸陽ゴルフ会幹事の山木さんに感謝。



「本誌註」三宅氏は、フジタ工業を経て、当時の肩書は三井不動産建設代表取締役。東急建設(歴代社長から年賀、暑中の挨拶状を欠かさず送られていた建設業界大物の一人。芸陽ゴルフ会コンペには運転手付きの黒塗り乗用車を終日待らせていた。

構えるや否や目にもとまらぬ素早いショットから「早撃ちマック」の異名もあるとかないたか。

赫々たる戦績から、第一人者として「ゴルフが上手くなる秘訣」とでもいったものを教えて頂きたい、と願ったが、このような控え目な一文となった。

# 竹林先輩らに続いて叙勲三人目誕生

## 勲四等に輝く海の男たち

三万人にも及ぼう同窓だから今までに叙勲で勲四等瑞宝章を受けた人は多い。しかし、同じ商船学校を出て外国航路船長を勤め、さらに水先案内人パイロットに転身し、その長年の功績を讃えられて大臣表彰、そして叙勲で勲四等瑞宝章を受ける…という長い人生で全く同じコースを辿った人が二中同窓に三人いるということをご存じだろうか。

一口にこのコースと言ったって、並み大抵のものではない。智力、体力ともに抜群の、物凄い競争を勝ち抜いた者に初めて与えられる資格、名誉であり、ケタ違いの高収入もそれに伴ってくる。  
この海のエリート三人とは誰か？

最初の一人は、<sup>も</sup>第1回卒の竹林信夫氏。  
そうです。毎年の在京芸陽会で卒寿をとっくに越

したとはとても思えぬ大音声で乾杯の音頭をとる御仁だ。やはり長年海で鍛え上げられたものはガタイの出来が違う。昨年の席でも、乾杯の前置きに「九年前に妻に先立たれて以来、掃除、洗濯、買物を独りでこなしています。」拍手を呼んでいた。

「昭和二年に二中を卒業したが、家庭の事情で進学できず、郵便局に勤めていたのを偶然路上でバツタリ逢った恩師に勧められて二中の物理化学教室の助手をしながら勉強し、東京の高等商船学校（後の商船大学）に進んだのが、今日までの人生に繋がった」

と述懐している。

叙勲を受けた時は東京港のパイロットをしていた。



二中→商船学校→船長→水先パイロット 生涯同じ道の先輩後輩。  
在京芸陽会で。右・竹林、左・石川（平成元年／二二会報9号より）

二人目は、<sup>も</sup>竹林氏の3、4年後を追った佐藤毅雄氏。現在西東京市に健在である。  
この人は山口出身で、わけあって広島一中に転校。そっちの面で活躍し過ぎたか、そして在学期間が短

かった故か、藝陽同窓名簿にその名は外れているようだ。しかし人生航路に間違いはなく、高等商船から三井船舶で外国航路船長、さらに関門港水先案内人会長となり、叙勲を受けて七十六歳で引退。令息が現在商船三井の副社長だというから「蛙の子は蛙」にしてもデカイ蛙。

竹林サン、佐藤サン、この二人が二中同窓だということをも三人目の先輩が知ったのは大分後のこととなる。

三人目とは二中22回卒の石川利之氏。<sup>も</sup>

東京商船大学を出て三井船舶に入社、六年後、欧州航路の貨物船「吉野山丸」一万二千トンに二等航海士として乗船中のことである。神戸で船長の交代があった。前任の竹林信夫船長、後任が佐藤毅雄船長、たまたま船長室へ行った石川航海士は二人の話の中で「広島二中の時、云々」の声を聞いたのである。それで初めて己と先輩達三人が同窓だということを知ったというから世の中面白い。

本誌松本はこの石川と同期だけに、彼について、また水先案内人の仕事についても、もう少し詳しく触れたい。

昭和二十三年、<sup>☆</sup>広島はまだ焼け跡が残っている福屋名劇でエロール・フリンの海洋活劇「シーホーク」を上映していた。これを観て、ヨシ、船乗りになろう！と発奮した一人の少年がいた。かつては陸軍幼年学校を目ざしたこともある石川利之である。

当時清水にあった商船学校に進んだ。三保の松原でデイト中、欧州航路に就航したばかりの新造船が富士山をバックに堂々と出航する様に感激、思わず彼女の手を握った…。

それから二十年、彼が初めて晴れて「船長」の職をとった船の名前が「明石山丸」三保の松原で見たあの船そのものだったのである。そてあのとき手を握った彼女が今の奥さん。正に「事実は小説より奇なり」。

一口に「船乗り」という職業にも機関長、事務長とか色々分類があり、各々重要な役目であることは間違いないが「船長」キャプテン」という地位は格別で、特に外地では「ベリーグー」だそうである。

彼のそれから十六年間に及ぶ外国航路船長としての活動は華々しかった。沢山の船を乗りこなし、「FULL AHEAD」（全速前進）と、世界中の港々でホテルごとホテルこと。



昔から言われる「七つの海の船乗りは、〈喜望峰〉を通過すれば船長室でテーブルに片足を放り上げられ、さらに〈マゼラン海峡〉を通過すれば両足を堂々と上げられる…」

これも実現させた。上の写真は「あらすか丸」ポートランド港のパーティでの一コマ。

一度出かけたなら何ヵ月も帰って来ないような洋上生活から、今度はこれまた難しい試験を突破して水先案内人パイロットへ転身したのが昭和六十年。勝手を知らないまま東京湾に入ってくる大型客船、コテナ船、タンカーなどへの嚮導／案内役である。

タグボートから繩梯子で大型船に乗り移り、「グッドモーニング キャプテン！」「グッドモーニング ミスターパイロット！」と挨拶を交わし、

指揮権を交代して、誘導しながら無事に接岸させる。チョットとぶつけでもしようものなら何億円の損害賠償を請求され兼ねない神経を使う仕事だ。離岸も含め、多い時には一日で6隻も嚮導することもあった。

何回も迎えたクイーンエリザベスII号などを含め、十八年間に世話をした船は九千隻にも及ぶ。



上の写真は客船「おりえんとびーなす」2万トンをバックに。

平成十二年の海の記念日に運輸大臣表彰、平成十五年春の叙勲で勲四等瑞宝章。

皇居豊明殿でホンの一米の近さで陛下の姿に接し感激したものでした。

今年六月、東京湾水先区水先人会を退会、四十余年の永きに亘った海の仕事に別れを告げた。自ら「ハッピーリタイヤメントを迎えられ幸せです」と宣もうとる。

一方、竹林サンは、今から五十年も昔の話だが、岡山宇野の三井造船で建造された世界で最初の全自動船「金華山丸」の初代船長として活躍したことを長かった海員生活の中でも最大の誇りとしている。この時、アメリカの海軍長官が「人工衛星でソ連に抜かれ、今度は船舶で日本に抜かれた」と口惜しがったそうである。

ご健在の二中第1期生は今や全部で五十人にも満たないのではあるまいか。在京の竹林サンが声をか

けてこの同期会を横浜で催し、十数人が船遊びを楽しんだのが十年前のこと。先輩の命をうけてガイド役を勤めたのが石川利之後輩だった。

親子ほど歳が離れたこの二人が在京芸陽会で顔を合わせたのは、些か古いが平成元年のことである。旧交を温め直している様が前頁の写真。

勲章がどうの、またその等級がどうのというより「人生で充実した仕事を完成させた」と胸を張っていえるとは正に男の本懐、羨ましい限りだ。

お三人さん、皆さんお達者で、目出たいこと、この上ない。

## 「石川氏から本誌へコメント」

竹林さんは我々航海士官から「うちの船長はパイロットより操船が上手だ」と噂される位自由自在に操船をされる名人でした。之は天性のものでありましょう。碁、将棋、麻雀、ゴルフ、その他のスポーツも一流の域に達して居られます。従って毎日忙しいのです。

佐藤さんは豪快な操船を大声で叱咤激励されながらされる方でした。叱った後でケロリとされているので若い士官に人気がありました。名古屋港に入港中、山口のお宅から息子さん東大合格の知らせがあり、夕食のテーブルがお祝いに変わった出来事を覚えています。その後、息子同士が先輩後輩ということもあって佐藤家には親子二代に亘り何かとお世話になりました。之も因縁。

関門港は潮流の激しい処から世界の海の難所として有名です。あの激しい港で水先人会会長をされ叙勲を受けられた事に心から敬意を表します。

石川記。

呆けず「芸は身を助く」

# 私の奇術人生

## 川崎 利秋 (二中17回卒)

(東京アマチュア・マジシアンズ・クラブ名誉会員／元会長)  
(元ミサワホーム監査役、社団法人日本ダーツ協会理事)



「本誌松本まえせつ」 毎年の在京芸陽会の席でアトラクションとしてマジックを披露してくれまます二中17回卒の川崎利秋氏。毎回新しい趣向をこらして喝采を呼んでいるものだ。二中22回期の会報が芸陽会発足間もない昭和六十三年に試みた「芸陽会アンケート」に対する答えに「在京芸陽会の会報を作ったら」と提案したたった二人の一人。今度この会報発行にあたって「お待たせしました」とばかりに、趣味のマジック、奇術に関する一文を依頼、快諾を得た。この文を読んで驚いた。今後はアダヤオロソカに、この人の手さばきを見物するわけにはいかないゾと。これ決して私一人の感想ではない筈である。

私の奇術との出会いは、遙か少年時代まで遡る。小学校3年生の頃だったように思う。ある日、父が手品を見せてくれるという。チリ紙を幾度か裂き、それを束ねて火をつける。口三味線に乗せて身振り手振りおかしく燃やしていく。燃えかすを両掌の中でもんでいるうちにお札が出現する。父の妙技に見える兄弟三人。ほろ酔い機嫌の父が何度となく見せた手品。七〇年近く経って、当時の風景がまざまざと懐かしく甦ってくる。

やはりその頃の事だったと思う。外国の魔術団の公演を一家で観に行く。術者が一人の男の顔を包帯でぐるぐる巻きにしてから催眠術をかける。催眠状態のままベッドに横たえ、術者は刀で首を切り落とす、その首を両掌で持ってお手玉のようにポンポンと弾ませて見せる。再びベッドのところに戻り、その首を首なしの胴体にくっつける。首はうまくくっついた状態で助け起こされ、術者が催眠を解き包帯を取り除くと、たしかに先ほどの男の顔が現れる。この時の強烈な印象は忘れがたい。

私にとって幼い頃の奇術との関わりの記憶はそれだけで、その後二〇年余の空白がある。昭和三十三年頃のある日、デパートの玩具売場の一角で、奇術用品を扱っているのに気づく。売り場のデモンストレーションをしている人のプロ級の演技に見惚れ



平成元年5月 テレビ出演  
司会 山城新伍、松居直美  
“シルクの消滅と出現”の演技

る。それからというもの、デパートを訪れると必ず奇術用品コーナーに足が向くようになる。気に入った道具を買ってきて、解説書を読みながら練習する。些か自信のついたところで家族や友人達に見せて大いに得意がっていたものだ。

昭和三十七年の早春だったと思う。仕事の関係でご招待を頂いた席で、森田さんという相手の方から思いがけもなく手品を見せていただく。それがきっかけで、其の年の十二月のある日、森田さんの推薦で、東京アマチュア・マジシアンズ・クラブの会員として入会が認められ、いよいよ奇術が本格的な趣味の一つに加わる事になった。全国にアマチュアの会は沢山あるが、そのなかでも最も歴史が古く、格式を誇る存在であると聞かされ、さしたる奇術歴も無いだけに、えらいことになったと戸惑ったものだ。当時、名誉会長が、虎狩で有名な徳川義親元侯爵、会長は病理学の権威で文化勲章を受章された緒方知三郎博士であった。会員は学者、弁護士、医者、経営者からビジネスマンに至るまでバリエイターに富



んでいる。将棋の木村名人や詩人の萩原朔太郎氏も名を列ねていた。

その他、著名人では、元皇族李王塚氏、リコーの創業者市村 清氏、演劇の鬼といわれた帝劇の秦 豊吉氏、外務大臣時代にレーガン大統領やサッチャー首相をはじめ各国首脳に奇術を披露しながら外交成果を挙げられた倉成 正氏、現在の会員の中ではベストセラー「頭の体操」の著者で元千葉大学教授多湖 輝氏、日本サッカー協会会長の川淵三郎氏等である。昭和天皇のご学友で宮内庁の掌典長をしておられた永積寅彦氏が会員であった関係で、天皇をはじめ皇族方の前で数回にわたって会員有志が奇術をご覧にいれている。

会員は、毎月2回の例会、1回の研修会に出席出来る。また年に1回の発表会で日頃研鑽の成果を披露する機会を持つ。また、研修旅行として毎年海外に出かけることにしている。各地の友好団体との交流、世界大会やラスベガスでの世界のトッププロの演技の観賞を目的とする。



昭47・10・27  
東京アマチュア・マジシャンズ・クラブ発表会にて  
“これがファミリーマジックだ”の父と娘の演技



昭63.10.16 第一生命ホール  
東京アマチュア・マジシャンズ・クラブ  
発表会での“天一のサムタイ”の  
まえせつの演技

入会して三〇年目の平成四年、第十四代会長に就任、史上最長の5年間勤めたあと、名誉会員として今日に至っている。

毎年の大会で色々な奇術を演じたが、最も印象に残っているのは、十三歳と四歳の娘と共演した昭和四十七年の大会である。「これがファミリーマジックだ」という題で、四歳の娘を主役に、長女と私が助演する。空っぽの筒の中から、繻、造花、小箱、色とりどりのシルク等次々と取り出され、最後に人形の出現でフィナーレとなる趣向だ。出演後、新聞記者のインタビューを受ける。奇術の効用として親子のコミュニケーションがよくなるといった内容の談話が翌日の新聞に載った。この日みえていた日本プロ奇術協会会長松旭斎すみえさんから「小さいのに、間の取り方といい、手さばきといい、全く素晴らしい」と褒められる。口の悪い仲間からは、お父さんより上手だとひやかされる。これで評判をとって、娘はその後、NHK、NTV、フジテレビと相次いで出演することになった。一昨年は中学生の孫のバレエを組み合わせた奇術を発表して話題をよんだ。

私の奇術も結婚式、歓送迎会、祝賀会、新年会、忘年会、同窓会などで演ずる機会が多い。特に結婚式や祝賀会の場合、おめでたい宴に因んだものを用いることで、紅白のシルクやロープ、松竹梅の扇子などを使ったりして道具立てにも気を配るようになる。

今年がわが東京アマチュア・マジシャンズ・クラブの創立七〇周年にあたり、盛大な記念事業を行うことになっている。私は記念事業実行委員長として、資金集め、記念誌、記念品、会員の演技ビデオ、発表会、パーティー等の準備で目下大忙である。

奇術を趣味としたおかげで、私の人生はまことに充実したものになったようだ。幾多の友人知己が出来たし、老後の退屈など全く考えられない。とりわけの効用は、手と頭を使うおかげで呆けない。約四〇年在籍の間、会員で呆けた人は例外なく一人もない。正に「芸は身を助く」の奇術人生である。



了

# ハーモニカとの出会い

在京芸陽△会で伴奏をする



## 井原 義量

(二中16回卒)

「本誌松本まえせつ」 草創期の在京芸陽会では武蔵野音楽大学の梶山三郎先生(二中12回卒)のピアノあるいはアコーディオンの生演奏があった。校歌の伴奏はもちろん、乾杯には「トラビータ」や「スタインソング」、その場その場で「コロラドの月」「アイルランドの村娘」等々が流れて楽しませてもらったものだ。その梶山さんは残念ながら七年を経て世界された。その後、校歌の段にはアカペラだったり、古いテープを使ったり。一昨年の在京芸陽会では同窓会本部から送ってきてくれた観音高校吹奏学部の新しい演奏テープを予定していたところ、二中々早稲田にかけてハーモニカで活躍されたという



井原義量氏(16回卒)が自らのハーモニカで伴奏したいとの申し出があり、「彩雲なびく」に続いて、さらに譜面だけで初トライという「ああ厳島」まで生ハーモニカによる歌声が実現した。 昨年も同様だったことは出席の方々には憶えておられる筈である。(左上は一昨年総会から)

本誌松本が昭和23年に二中を卒業する前、当時はまだバラックに毛がはえたような校舎で或る時、プロのゲストによるハーモニカの生演奏があった。それまでは1本で吹くことしか知らなかっただけに、3本を駆使して半音を自在に奏でる様にショックを受けた記憶がある。先日の芸陽会世話人会に同席した井原さんにその話をしたところ、「それ私です」にビックリ!。よくよく聴いてみると、それは違っ人だったが、井原さん自身が二中で演奏したことがある、という、ならばと、それらの想い出を一文依頼したところ快諾を得た。

井原義量氏(16回卒)が自らのハーモニカで伴奏したいとの申し出があり、「彩雲なびく」に続いて、さらに譜面だけで初トライという「ああ厳島」まで生ハーモニカによる歌声が実現した。 昨年も同様だったことは出席の方々には憶えておられる筈である。(左上は一昨年総会から)

私がハーモニカを初めて手にしたのは、小学校二三年の頃で、当時商社に勤めていた叔父が川口バンドの特性23穴を持ってきたのがきっかけで、その頃としては最高クラスのもので、主として輸出されていた製品と聞かされたのを覚えています。

ハーモニカを手にして一週間位たったある日、偶然に「お山のお猿はマリが好き」の小節が吹けたときの喜びは、今でも脳裏に残っています。

その後、小学校唱歌の「港」や童謡の「夕焼け小焼け」等、手当り次第に自己流にベースなしのままメロディーのみ吹いていましたが、小学校六年に父の転勤で広島に住むことになり、「済美学校」に編入し、昭和10年4月から白島より徒歩で通いました。翌年広島二中に入学して、向かいの井上浄君と一緒に通学したのですが、彼は一年の初めから弓道部に入りましたが、私は三年生になってからの入部です。

その当時同僚だった高田 洋君、井上 浄君と共に津田道場に入門し、腕を磨いた甲斐があり、四年生の頃に呉から転校してきた木村 功君(本誌註II後に俳優として活躍)とすぐ仲良しになり、4人でよく遊んだものです。 木村君は筋がよく、二段を取ったので、私も負けずに四年の3学期に二段の試験を受けたのですが、不合格となり、その時の無理が災いして肋膜炎になり、1年休学して17年3月に(第16回卒) 広島を離れ、東京に住むことになりました。3月卒業式では、同じ弓道部の松田君がヴァイオリンを演奏することになり、私にハーモニカ演奏するようにとの話がありました。在学中の思い出としては、広島県弓道大会で、五段以下の先生方も入った中で私一人だけ八射八中で優勝し、翌日の朝礼で全校生徒の前に出て披露された以外は、目立った印象のない5年間でしたので、二中最後の思い出

を残すことにしようとした次第です。

今でも、演奏の途中で2段に持った上の方のハーモニカの半音階高い「レ」と「ファ」のシャープに切り替えた瞬間、講堂全体から驚きの響きが聞こえ感無量の状態で演奏したことを思い出します。その当時は広島島の楽器店に半音階高い特殊のハーモニカがありませんでした。広島高工のハーモニカ合奏を公会堂で聴いたときに、皆が器用に「美しく青きドナウ」を演奏しているのを、自分も挑戦しようと思いい、全部の音を半音上げるには大変なので必要な音だけ選んで、そのリードの先端を組ヤスリで削って仕上げたものです。

さて、東京に来て一年予備校に通った後、早稲田専門部工科機械科に入學しました。中学時代からトンプの「アコハモ」誌を読んで早大ハーモニカバンドの存在を知っており、合格したら是非入部したく考えていたのですが、弓道場を先に見つけたので弓道を優先させました。

当時は戦争中でしたが、横河電気や沖電気等の会社にはハーモニカのバンドがあり、競って合同演奏会を行ったり、国立病院への傷病兵の慰問等に活躍していたのです。我々学生は勤労働員に駆り出され、私たち機械科の学生は、日本ピストンリングや日本建機など動員先で同級生と、昼休みにハーモニカ同好会と小バンドを結成して合奏の練習、学校外での活動に終始しました。



日立蛍光ランプ(株)に入社して3年目位のとき

終戦の翌年の昭和21年4月に早稲田理工学部機械工学科の一般募集の入学試験があり、学院以外からの混成メンバークラスができた第39回生として入学しました。たまたま専門部以来の友人から、当時の学生食堂の2階からハーモニカの音が聴こえるので行ってみたいかと誘われ、二人で一緒に入部しました。念願だった早稲田ハーモニカソサイエティーでの活動の始まりです。学業の方は、専門部と同じ科目が多いことから、専ら時間当たりの単位の多い科目を選択し、余った時間をアルバイトとハーモニカの合同練習に当てて、戦後の学生生活をエンジョ

イしました。

当時のソサイエティーは、川田さんという先輩が指揮者でした。前述したように私は中学時代から音階で必要な箇所をシャープに音上げたハーモニカを自分で改造して使用していましたので、川田さんからメインパートを受け持つように指示され、卒業

まで同じパートを演奏することとなりました。当時は戦後間もないことで、思うように楽器を入手できず、ホルン、セロ、バリトン、バス等の合奏用ハーモニカは、顧問の先生のお力添えで準備して戴いたものを使用して練習していた次第です。

昭和22年6月、大学の「戦後復活コンサート」では、レコード会社専属の松島詩子、市原悦子、池真理子さんの応援や、ソサイエティーの沢山の先輩が我々メンバーと共に学生服を着用して応援出演して戴き、無事に演奏会を行うことが出来たことに今改めて感謝の念を新たにしています。

このときのことです。私が一番印象に残っていることは、当時の一流女性歌手を目の前に見ながらの演奏を体験したこと。歌手の皆さんが、一日前の練習歌合わせに小講堂にいられたときの薄化粧のお顔と、演奏会当日日本番でのお顔の大差に大変驚いたことがいまさらながら思い出されます。

その後、都心や各地方都市への演奏旅行や講演会を行っています。今回は此処までにて筆を置きます。

平成十五年九月七日



# フィリピンで第二の人生を謳歌する

## 秦 光俊 氏 (二中21回卒)



年金で行ける！

### 海外リゾート

アジア版

月20万円でOK!

アジアの楽園で豊かな暮らしを体験しよう!

「楽園生活」のイメージを演出する美しい風景写真が満載。フィリピン、タイ、マレーシア、インドネシアなど、海外リゾートの魅力を伝える。また、現地での生活の様子や、観光情報なども紹介。

「老後は海外で過ごしたい」という声はよく耳にする。しかし、実際に行動に移す人はまだまだ少ない。この本を通じて第一歩を踏み出して欲しい！... こういう書き出しではじまる。

海外移住、長期滞在を研究する【ハッピーリタイアメント研究会】というライター集団が編集して実業之日本社が発行したこの本は、年金頼みで海外に移住、この場合はアジアに限定して成功した例を、フィリピン六、タイ六、マレーシア四、計十六例紹介している。

この十六例の一人に我らが二中同窓、21回期卒の秦 光俊さんがいるのだ。

秦さんは、今の山本和雄世話人(観音3回期)が引き継ぐまで芸陽ゴルフ会の世話

人役を引き受けていた。それが現在は何とフィリピンに移住してゴルフ三昧どころか孫の歳くらい若いフィリピン人の奥さんと結婚し、七十二歳でパパになった、というんだから、これは吃驚してもおかしくあるまい。

「フィリピンで年金生活を送る秦光俊さんは、二〇〇一年八月、元氣な男の赤ちゃんを授かった！」から始まり、8頁にわたるこの記事が全部というわけにはいかないが、半分の4頁でも大體理解できるのであるまいか。よかったら縮小コピーをルーペでも使って読んでいただきたいもの。

秦さんは長年建築設備関係の仕事をしてきたが、五十三歳で奥さんを亡くし、千葉県で息子夫婦と一緒に暮らしていた。独りになってから海外ゴルフが増え、東南アジア特にフィリピンのゴルフ場に入れ込んでしまった。日本での仕事は息子がいるので後顧の憂いはない。これ当時私が直接本人から聞いた言葉である。加えてタレントとして日本で働いていたことのある四十二歳下のフィリピン女性と知り合って結婚する。フィリピンに移住することへの障害は不思議な程少なかったと言うより、条件が揃っていたようにすら私には思える。

ダバオ

高血圧もすつかり治り七〇歳を超えてパパに

秦光俊さん

### 年間三万円弱でゴルフ三昧

フィリピンで年金生活を送る秦光俊さんは、二〇〇一年八月、元氣な男の赤ちゃんを授かった。当時、秦さんは七十二歳、フィリピン人の奥さんは三〇歳。男の子はパパから「光」の字をもらって、光治くんと呼ばれた。

秦さんが四二歳下の奥さんと出会ったのは六八歳のとき。日本人の知り合いから紹介されたのがきっかけだった。奥さんはタレントとして日本で働いたことがあり、日本語が少しできる。知り合ってからすぐに一緒に暮らすようになり、二〇〇一年に正式に結婚して、子どもをもうけた。ダバオに住む日本人のあいだでは「しっかり者の奥さん」として知られ、秦さん夫婦の仲むつまじさは評判である。

秦さん一家の住まいはミンダナオ島のダバオ市にある。間取りは4LDKで、月々の家賃は八〇〇〇ペソ(一万九二〇〇円)。ダバオではわりとリーズナブルな物件だ。食費や光熱費など基本生活費の合計は平均六万ペソ(二四万四〇〇〇円)前後。これには住み込みのメイドの月一〇〇〇〇ペソ(二四〇〇円)、やはり住み込みのベビーシッターの月二〇〇〇ペソ(四八〇〇円)が含まれる。これは人件費の低いフィリピンでもかなり安いほうだ。

「月々七〇〇〇円強でふたりが住み込んで働いてくれるのだから本当に助かります。ベビーシッターの娘さんは子ども部屋に寝ていますから、二四時間態勢で面倒を見てもらえます。小さな子どもや要介護のお年寄りがある家庭では、人件費が安いことは大きなメリットですね」

秦さんは日本からの年金が月々二〇万円以上ある



1929年広島市生まれ。旧制中学3年のときに被爆。建築設備関係、建築設備管理の会社でサラリーマン生活を送る。69年より海外でゴルフを始め、その延長でフィリピン、ダバオを結ぶ。96年にダバオに移住し、97年に結婚。

フィリピンが気に入った秦さんたちは、現地に知り合いもできて、マニラを拠点にゴルフ場をまわることが多くなった。やがて、ほかの地方にも行ってみようということになり、秦さんたちはダバオにやってきた。  
「そのときはダバオに三泊ほど滞在しましたが、落ち着きのある実在のいい街だといつぱんで好きになりました。リゾート気分も満喫できて、都会のマニラとは違ったよさです。すぐにまた遊びにきたいと思いました」

「日本に戻りたいと思ったことは一度もない」

秦さんは東南アジアをめぐるうちに、六五歳で定年退職したあとはアジアの国で暮らしたいと思うようになっていた。子どもたちは独立しているし、自分にとってもそのほうが気楽でハッピーな老後だと思ったのである。はじめのうちは、移住するならタイのバンコクがいいと考えていた。ところが、ダバオに来て考え方が変わった。

「バンコクもいい街ですが、何年も通っているうちに急速に経済発展して、物価がみるみる上がっていったんです。そうすると老後の年金生活が厳しくなってくる。反対にフィリピンのほうは、何年たっても物価が上昇していません。ちょうどそう考えている時期にダバオへ来て、この街のよさを知ったんです」

六五歳で定年退職する予定だった秦さんが、会社からの要望があつて六八歳まで働いた。その分、移住計画も三年延びたわけである。

秦さんがいまの奥さんと知り合ったのは、会社を辞める少し前だった。秦さんはいま住んでいる家に移り、まもなく奥さんと一緒に暮らすことになった。

秦さんは、フィリピン人の奥さんをもらったことで、たくさんの恩恵を受けている。

たとえば、いま秦さんの家で働いているベビーシッターは、奥さんの故郷から住み込みでやってきている。そのため、通常ダバオで人を雇うよりも給料は低めだ。日本人はメイドやベビーシッターを使うことに慣れていないから、他人が家に入ることを好まないところもあるが、フィリピン人の奥さんなら言葉も通じるし、メイドもうまく使える。

海外生活では、信頼できる現地の人を味方につけるほど心強いことはない。しかも秦さんの場合、奥さんは日本語ができるから、通訳にもなってくれるわけだ。

「ダバオに住んでから、日本に戻りたいと思ったことは一度もないですね」

秦さんはそうキツパリという。



ダバオというところはミンダナオ島の南部にあるフィリピン第二の都市だが首都のマニラに比べ治安もよいし、自然に囲まれた豊かなリタイアメント生活が出来るそう。一年を通じて最低気温が二二度前後、最高も三四度前後とほぼ一定。湿度も低くフィリピンではかなり過ごしやすいつか。おかげで高血圧が直り、血圧降下剤をのまなくなったというのだから結構な話。  
メンバーになっている18ホールのクラブに年会費二万九千円足らずを払えば何回利用してもグリーンフィーはかからない。週三回プレーするのもうなすける。

ゴルフもさることながら、基本は生活費だ。日本からの年金が毎月二十万円以上あるが、これで住込みのメイドとベビーシッター二人を雇っても十分におつりがくるという。「日本に戻りたいと思ったことは一度もない」そうかそうか。

…この本のラストの数行を忠実に転載しよう。

秦さんは午前中にラウンドした日は、帰宅してシャワーを浴びてから一時間ほど昼寝する。夕方は家で光治くんと遊んだり、家族で買い物に出かけたり、ビーチでゆったり過ごしたりする。夜になればケーブルテレビで日本の番組を観てプロ野球のシーズン中はインターネットの中継で広島カープを応援する。二〇〇三年五月には、なんとふたり目の赤ちゃんが誕生する予定だ。ダバオの生活が、満足度の高いものであることは、秦さんの笑顔を見ればよくわかる。

この本は前記芸陽ゴルフ会の山木世話人から贈呈を受けたものである。伴侶に先立たれるという不幸にめげず、新しい人生を開拓した秦サンに拍手を送ろう。

ついでながら、本誌松本は秦サン的一年下。二中部活では、勤労働員に駆り出されるまで共に「射撃部」に所属していた。  
（人に歴史あり）校庭の隅で撮ったその頃の古い写真、傷んでいたものをパソコンで修整してご披露する。おぼろげながら、少年時代の秦サン、在京芸陽会仲間の藤川浩司サンらの顔が残っている。



立っている… 左から藤川（2年生）、堀内（4年生）そして3人目が秦（2年生）  
前列坐る中央、回りより大きいのは阿賀利（2年生/故人）、その右隣・松本（1年生）

意外な顔ぶれも…

# 被爆者運動に献身する在京同窓

広島は今更申すまでもなく、長崎と並んで「原爆都市」である。被爆者は、全国で約二十八万人、そのうち、首都圏の在住者は、東京に約九千人、神奈川県に約五千八百人、千葉県に約三千五百人、そして埼玉県には約二千六百人が数えられている。

被爆者の多くは、自らの体験から「ふたたび被爆者を作ってはならない」と強く希っており、いわゆる「被爆者運動」（核兵器完全禁止、被爆者援護）に関わっている人も結構いる。革新政党の応援もあることから思想偏向だと忌避する向きもないではない中、イデオロギーなど超越して純粹に献身する熱心な被爆者仲間もいることも事実。首都圏在住でそうした活動に携わる人たちに、二中、観音の同窓が、いるのだろうか。

「日本原水爆被害者団体協議会」略して「日本被爆協」。これを被爆者団体の頂点として、その傘下に各都道府県「被爆協」があり、さらにその下に地区の会が各々の名前を持って存在する形だが、その性格や活動状況はマチマチである。それぞれの活動に同窓の名前が見つけられるか探ってみよう。物故者の思いも含めて。先輩後輩の垣根を取り払い、客観的な視点から敢えて敬称も略させて頂く。

東京都段階の組織が「東京都原爆被害者団体協議会」通称「東友会」。これは広島、長崎を除き全国都道府県の中では最大の組織といえる。

この常任理事には町田「町友会」の高木陽雄、府中の「府中きすげの会」の副会長も兼ねる池内正躬宅明香澄、そして「東村山の会」役員の高島能仁の名前が揚げられる。この四人は揃って二中22回卒だ。高木陽雄は常任理事歴も長く、22の同期会（二二会）会員の手帳取得、手当受給の相談にのっている。

宅明香澄は自らの被爆体験記が昨年週刊朝日が募集した（読者の自伝）で優秀作を受賞した。

筑波宇宙センター所長を勤めた池内は「遅まきながら」（本人弁）運動に参加、自らの人生指針の一つに被爆体験の継承を挙げている。

「府中きすげの会」の会計を担当している伊藤 司は二中23回卒。彼と同期で東久留米に住む田丸正夫は「東久留米友の会」会長と併せて「東友会」の監事もつとめている。

## 早大元教授も立ち上がる

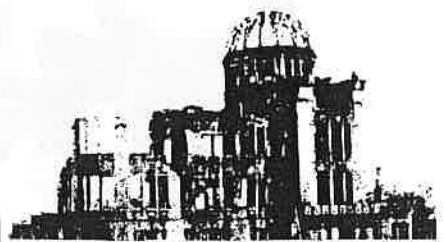
同じ23回卒で二中校舎で被爆した森川靖夫（「新宿新和会」）は昨年早稲田大学教授を退職したが、在職中「原爆は忘れよう」と大学では一度も被爆体験を語らなかったのに、自らの直腸ガンが原爆症と認定されなかったこともあって国の基準に疑問を持ち、折からの認定集団訴訟とあいまって「身体をか

けて原爆被害を明らかにしたい」と立ち上がっている。「今こそ私たちが」と学生達に被爆体験を語り継ぐ様は今年一月号の東友会機関紙「東友」一面に大きく掲載された。（コピー次頁）

また22回卒の一人だが、葛飾「葛友会」の林 浩は同会がまとめた「原子野に樹々よ」（84年11月）に「炎の日から」と題する手記を寄せている。また昨年二月、百十二号と歴史を誇る「自分つうしんヒバクシャ」という月刊紙に袋町小学校にまつわるエピソードを「カベの伝言」として寄稿している。

もうひとり22回卒、フジヤマのトビウオ古橋選手らと日米水上で活躍した田中純夫が二中12回卒の原正生会長の後をうけて「田無友の会」会長に就任したのは平成八年のこと。その後、保谷市との合併によって生まれた「西東京友の会」の副会長を勤めている。

またまた22回卒、「世田谷同友会」の三宅 光は平成九年に亡くなったが、生前勤め先の大田区役所を毎年八月六日には休暇をとり、あの日を悼んでいた。同友会発行の図書「被爆五〇年―あの日から明日へ―」に「慟哭の手記」を載せている。



**友の会**  
 ●ホームページ・アドレス  
 http://www4.ocn.ne.jp/~t-hibaku  
 ●Eメール・アドレス  
 t-hibaku@gaea.ocn.ne.jp



**No. 219**  
 東京都原爆被害者団体協議会 (東友会)  
 〒113-0034 東京都文京区湯島2-4-4  
 電話 03-5842-5655  
 FAX 03-5842-5653  
 伝真 03-110-0-22914  
 活動時間 11:00-17:00 (郵送料等別)  
 会費・賛助金・寄付金は、別紙に記す

## あの日の語り継ぎ いまこそ私たちが

早大学生らが元早大教授の被爆体験聞く



▲「アメリカの大学で被爆者だと知られて体験を話した」と森川さん  
 ▼真野なまなごとしてメモをとっている森川さんの話を聞く学生たち



「大学では一度も語らなかった」「原爆症認定で国基準に疑問」  
 (17日 目黒区)

1次被爆世代としての使命を帯びた「東友会」が、11月17日(日)に東京都文京区湯島にある「東友会」で、早稲田大学(早大)の学生らに、元早大教授の被爆体験を語り継ぐイベントを開催した。

この日は、早大の学生ら約100人が参加し、元早大教授の被爆体験を語り継ぐイベントを開催した。この日は、早大の学生ら約100人が参加し、元早大教授の被爆体験を語り継ぐイベントを開催した。

**学生らの追憶**  
 被爆者がききつけ

早稲田大学の学生ら約100人が参加し、元早大教授の被爆体験を語り継ぐイベントを開催した。この日は、早大の学生ら約100人が参加し、元早大教授の被爆体験を語り継ぐイベントを開催した。

**世界の反対**  
 思いやる人に

「世界には、思いやる人がいる」と、元早大教授の被爆体験を語り継ぐイベントで、早大の学生ら約100人が参加し、元早大教授の被爆体験を語り継ぐイベントを開催した。

「世界には、思いやる人がいる」と、元早大教授の被爆体験を語り継ぐイベントで、早大の学生ら約100人が参加し、元早大教授の被爆体験を語り継ぐイベントを開催した。

森川・早大元教授の活動は「東友」に大きく掲載された(03年1月)

故人もうひとつ、二中20回卒でありながら22回の名簿にも載っている異色の増原克司は悪性リンパ腫で平成八年に没。晩年に『東友会』常任理事「渋谷明友会」事務局長として被爆者の世話をしていたことを知った友どもは生前の『夜の帝王』振りを懐かしんでいる。

意外と思われるかも知れないが、在京芸陽会で毎回マジックの妙技を披露する二中17回卒の川崎利秋はミサワホームなどの仕事の傍ら98年まで3期『東友会』の常任理事に名を連ね、また地元小金井市の「折鶴桜会」の役員を昨年まで数期務めていた。今でも被爆者行事などで妙技を見せて喜ばれている。

また22回卒か、と言われそうだが、この資料の骨子を纏めた人物を紹介する。商工中金を勤めあげて今は経営コンサルタントをなりたいとする亀井賢伍「東友会」の中では「あの人なら知ってる」と名の売れた大きな存在と誰もが認める。彼は勤務上、新潟、福井など全国各地を転々としていたころから被爆者運動に携わり、「77年東京に移ってからの約十年間を『東友会』事務局次長(財政担当)、さらに日本被爆協の会計も十年間担当したというキャリアの持ち主。併せて目黒区(目黒明友会) 世田谷区(世



亀井 賢伍

田谷明友会) で世話人として会計を担当した。86年に横浜に移ったが、今でも「明友会ニュース」や「同友会だより」が送られてくる。

ついにながら本誌松本(22回卒)は川崎市在住。「川崎市折鶴の会」の役員として櫻がけで被爆者援護法成立に国会請願を行った一度きりの経験に、横浜からの亀井と一緒にやったことを思い出す。その松本は毎年の被爆者宿泊保健事業を何度もビデオ撮りしてその継続を川崎市に訴えたが、財政難でこれが今年で中止、彼もなげなしの生業との並立が成り立たず、ズボラもあって役員を辞任してしまった。

この他、同窓以外に二中関係者をあげると、東友会組織部長山下久代(墨田区「墨田折鶴会」会長)のご尊父は二中教頭先生。

東友会常任理事の高木恭之(港区「港友会」)は前掲・高木陽雄の実弟。

こういった集いで初対面でも、何かで同窓の繋がりがあるとわかると、ぎこちなさが消えてイッペンに親しくなると聞く。

この場で名前が漏れている方々、地道にこつこつ縁の下で活動しておられる人たちにこそ光を当てるべきだと常々思っている。これは亀井賢伍の言葉である。

「本誌註」この記事は亀井氏の資料を基本に、池内、高島各氏の協力を得て構成した。

# 県人会でミニ芸陽会



## 平成十五年

在京の広島県人会新年総会の席の一隅を二中、観音の同窓生が陣取り、さながらミニ芸陽会の呈を見せはじめてから、かれこれ十年になるうか。それまでの上野精養軒から赤坂のニューオータニへ定席を移したのが平成六年、いつも拠点とする左前列のテーブルが司会者席に近いこともあって、このときは司会者の頼近美津子さんを引っ張り込んで記念写真をとった。平成十二年には会場が赤坂プリンスホテルへ移ったが、引き続き毎年何となく郷土出身の名士を囲んでカメラに納まるのを恒例としてきている。22回期が作ってきた二二会報に掲載するのが目的ではあった。

この間には藤田雄山県知事、檜山県会議長、藤田明前日本水連会長、安芸乃島関、東京オリオンピックで活躍した池田敬子さん（日体大スポーツ局長）といった顔ぶれがあり、一昨年には酒の佐々木久子さん、昨年は石本美由起日本作詞家協会名誉会長にお付き合い願った。この新年総会はますます盛況となり、大混雑の中を勝手に動き回る

出席の同窓が一緒にカメラに納まるのが至難の業となってきた。そして今年平成十五年一月二十二日の総会で、観音14期の同窓・檜山俊宏県会議長と一緒の場面が上段の一枚である。左頁上はその会場での広島県人とのショット。併せて二二会報ではスペースが狭くて大きく掲載出来なかった一昨年、昨年の2例もこの誌面で大きくした記録をアルバムの残そう。

(左頁下段)

## 平成十五年 広島県人会総会 & 新春懇親



挨拶する檜山議長、左は岡田県人会長、右は藤田知事、右端は宮沢元総理





劇団「民芸」の若い女優さんと… ↑

ア、何だ、小早川さんじゃないですか、  
昔カープ、今はNHK解説者と… ⇒



## 平成十三年

この年のこの席は「ごったがえし」という言葉がピッタリだった。大混雑の中で「酒」の佐々木久子さん（県人会名誉理事）をテーブルにお招きしたが、思い思いに散らばっている十数人の同窓全員を集めるのはおおよそ無理。居合わせた者だけで、手にするは勿論ヒロシマの銘酒。



## 平成十四年

「ごったがえし」から「芋の子も洗えない」までの超盛況。「憧れのハワイ航路」、ひばりの「悲しい酒」の作詞家石本美由起氏（前方松本と手を握っている）を居合わせた連中で囲んだが、今度はカメラの引きがとれない。顔と顔をくっつけるような申しわけない結果になってしまった。

# 航空業界の大物も二中同窓だった

## Ⅱ日航システムの船曳氏Ⅱ

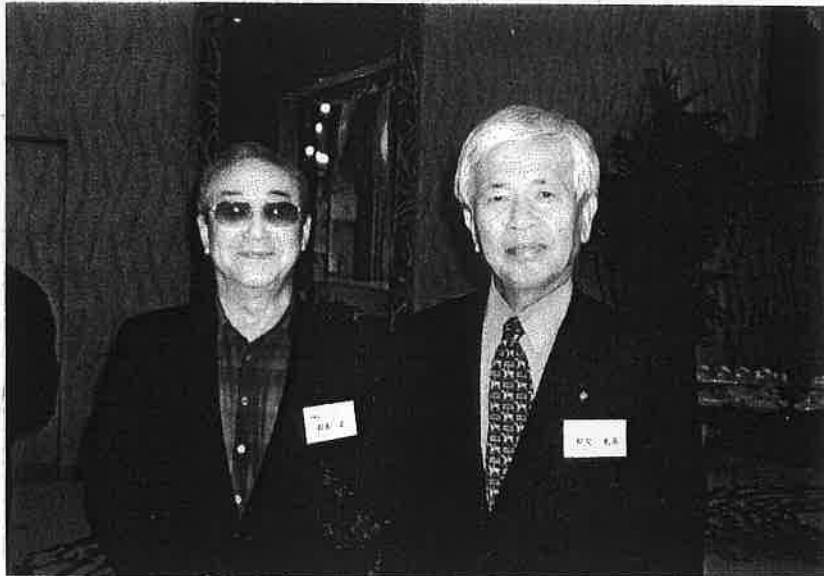
わが国の航空業界が「日本航空」「全日本空輸」そして「日本エアシステム」という大手3社だったのが昨年日本エアシステムと日航との経営統合が実現し、この業界が大きく再編成されたことは大方の知るところである。

しかし、その日本エアシステムを日航に統合させるという大事業を成功させた立て役者が当時の船曳寛真社長。この航空業界の大物が広島二中の卒業生であったことを知る人は少ないのではあるまいか。

JAS日本エアシステムという会社は東急グループの一角「東亜国内航空」としてスタートし、マンモス的な日航、さらに全日空という巨大企業と肩を並べかけるところまで成長していたが、激烈なサブイバルで生き残る最善の策として日航との経営統合という賢明な途を選んだ。お陰で日航は弱かった国内線を補強出来、両社とも「JALグループ」として国際線と国内線の比率が1対1となって、競争力は倍加したといわれる。彼の肩書きは爾来JAS社長と併せて「日本航空システム代表取締役」。

本誌松本はかねて広島県人会の名簿にこの「船曳寛真」というどちらかといえば珍しい名前を見つけ、たしか二中の昭和二十三年頃の古い名簿にあった名前だが?...と気になっていたのが、昨年の同役員懇

親会でやはりそうだったということがわかって一緒にカメラに納まった。(写真)



左 松本 右 船曳

母校創立八〇周年記念名簿では24回期卒となっている彼は、藝陽文藝部編集・昭和二十三年二月発行の「藝陽」復興特号、ポロ紙が黄ばんで今やほとんど読めないこの冊子に「ふるさと」と題する三年船曳寛真のエッセイを載せている。姫路から足ののろい姫新線に揺られて二時間。それより四里の山道が無愛想な私営自動車で北に走り、着いた所は山又山で囲まれた淋しい山間の農村、しかしこの単調で何の慰安もない村も自分にとって少年時代の大半を過ごした懐かしい我が故里です。...とはじまる。自作の俳句や万葉の古歌も引用するなど結構な文人中学生だ。寛が實になつていたがこの頃の名簿ではこの程度の間違ひは珍しくなかった。この話は二二会報最終号で紹介した。

今年六月、社長定年制度もあって、エアシステムの社長も退き、現在の肩書きは「日本航空システム取締役特別顧問」となつて少しは時間的な余裕が出来たと喜んでいる。男子志を立てて郷関を出で現在は横浜市青葉区あざみ野在住。広島県人会では花芸の安達瞳子さん、東京オリンピックで活躍した池田敬子さん、私の小学校先輩・順天堂理事長の石井昌三さんと並んで常務理事を務めている。これは家賃(役員会費)が高いです。

県人会の岡田会長(東映会長)も東急との縁も深いところから、日航との統合を我がことのように喜んでいて。

実業界で活躍するこんな同窓がいることに本誌は黙っておれない。一問一答のインタビューを試みよう。

〔問①〕 日航との統合でもっとも苦勞した点は何でした？一つでなくても、いくつでもいいけど…

〔船曳〕 三つあります。

(1) 先ず、株式統合比率の決定… 株主利益の確保が大切ですからこれが最初の問題だった

(2) 人事問題でした。企業統合は資本の統合であると同時に、組織と人の統合であるから、人心融和が大切です。2社には企業風土の違いがありました。JALは国際線中心の国営企業から出資したものであり、JASはローカル線中心の純民間資本で出資したものですから。

(3) 公正取引委員会の承認です。3社体制が2社体制(JAL、ANAグループ)となるのが、独禁法に触れるおそれがあり、公正取引委員会の承認が遅れたことです。これはマスコミでも報じられた通り。

〔問②〕 もっともその前に、JASをTDAというチップケな会社からあそこまで大きくするのが大変だったでしょう。

〔船曳〕 JASは三十二年前に日本国内航空(東急系)と東亜航空(広島本社不二サッシ)の2社が統合して「東亜国内航空」として発足したものです。(一九七一年五月)大阪万博の直後で正に日本経済の高度成長期でした。如何に事業を拡大するか(JET機導入、幹線ダブルトラック、国際線進出、等)のみを考えればよかったです。苦勞は少なく、やり甲斐がありました。

〔問〕③ SARRSの影響、落ち着いた今だから兼子日航社長のように「一過性でよかった」と言えるかも知れないが、当時は氣をもんだでしょうね。

ところが、香港なんか一度激減した客が今度は増え過ぎて困っているという。こんな様子をどう見ていますか？

〔船曳〕 中国旅行―ビジネス客は戻ったが観光客は半減、今年の冬が勝負です。これを使い越えれば対中国の観光客は期待出来ます。

〔問〕④ JALが七月に値上げしてANAも追随しました。私みたいに広島へは新幹線を使わず飛行機一辺倒の乗る側にとっては面白くない。JASの2カ月前早割まで、統合してから条件が悪化したりしている様子。氣を悪くさせるかも知れませんが、この点は日航のどちらかといえば高品位な性格に添わされたのではないかとJASファンは一寸首を傾げています。

〔船曳〕 新会社J持株会社日本航空システムは、国内線をJAS中心で「日本航空ジャパン」、国際線をJAL中心で「日本航空インター」となり、平成十六年春から棲み分け運航を分担します。長所と特色を生かすわけです。

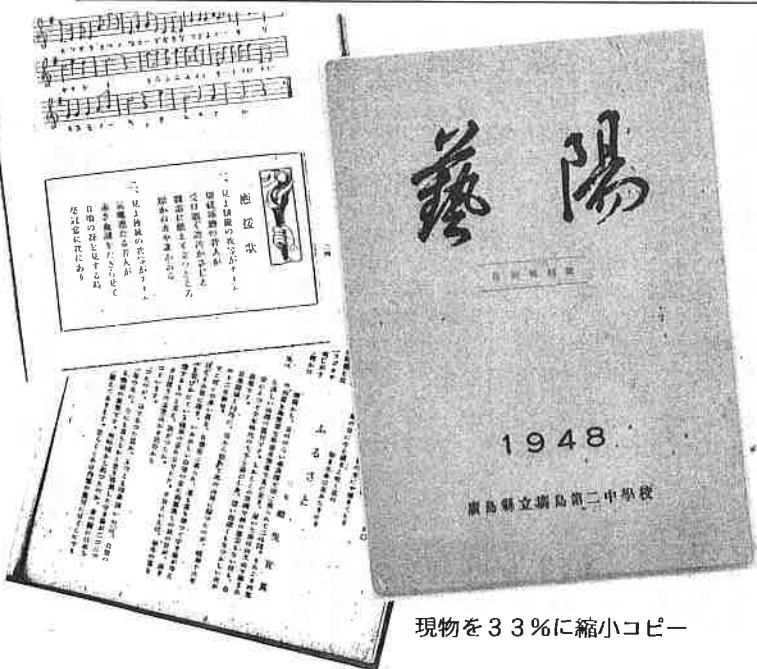
〔問〕⑤ テロ、イラク戦争…と苦しむ問題は尽きないわけですが、今後は日本の航空業界に対する大所高所からのお目付けとしての存在が期待されていると思います。よかったら同窓の皆さん、とりわけ後輩の皆さんに実業界の先達として一言頂きたい。

〔船曳〕二十一世紀は経済のグローバル化、国際化の時代です。

Boys be international!

### 古色蒼然の学校誌「藝陽」

船曳少年が寄稿した学校誌「藝陽」一九四八年発行の〈復興特輯號〉何故か本誌松本が温存しているこの冊子はA5判、六二頁、本文でふれたように藁半紙が黄ばんで古色蒼然。中には当時の6から8ボ程度の小さい字がギッシリ。仮名遣いは新旧チャンポンながら漢字は当用指定制前の難しい本字ばかりで、全く〈時代〉を感じさせる。巻頭言は校長・古田貞衛、「藝陽の思い出」教官・中谷春司、「しるべ」教官・堂崎 豊、「厚生部のことども」教官・關本雪象、「所感」大熊武吉、とあり、校友会記事には「文化部雜感」文化部長・西村正男、「スポーツ隨想」体育部長 杳木一郎…といった当時を知る人には懐かしい名前が続く。生徒の寄稿は全年次にまたがってはいるが、22期が卒業年次の五年生としてもっとも多く、故郷山季之作詞の「応援歌」も譜面と併せて掲載されている。



現物を33%に縮小コピー

# 惜別

## 皇太子に麻雀の貸しがある？

「排球はわが人生の全部なり」

### 故 谷口 清氏

(二・中9回卒)

いまだ敗戦の傷は癒えていない昭和二十八年、一九五三年の三月三十日、エリザベス女王戴冠式に列席するため渡英する皇太子明仁親王を乗せた豪華客船プレジデント・ウイルソン号は吉田茂総理などの見送りを受けて横浜港から出航、先ずは太平洋を一路ハワイへ向かった。この船にはまた若き日本人の一団体が乗っていた。全米選手権大会に遠征する早稲田大学バレーボール部一行十三名である。

チームは毎日朝夕甲板で練習を続けていた。当時十九歳の皇太子がその様子を見ようとして近づいたとたん、船の揺れも手伝わったか逸れたボールがその額にボールと当たったのである。怪我をするほどのことはないにしても、青くなったのはチームの側である。しかし皇太子は立腹することもなく、何とこれを機会にチームと仲良くなり、航海中、将棋、麻雀まで楽しむようになったというから世の中わからない。全員の記念写真も撮った。皇太子の右側、三〇番がこの早大チームを率いる監督、広島二中を昭和九年に卒業して早稲田に進んだ谷口清氏である。時に三十六歳、人生盛年期のバ

リバリだった。皇太子の坐った後の椅子にすぐ、「俺が一番だ」と腰かけてはしゃいだ。問題のボールには誰かが「殿下に当たった球」と書き込んだが三日後、練習中に海に飛んでいったそうである。このエピソードは一昨平成十三年四月TBS放映の「天皇・皇后両陛下ご成婚スペシャル」特番の中で披露された。(写真左・上中2コマ)

同氏からは、折りにふれ「皇太子に麻雀の貸しがある」と聞かされたものである。聞かされる側が「ウソだろう」と決めつけることもなかった。

これより二年溯る一九五一年、IOCが日本の加盟を承認し、オリンピック参加を決定、日本バレー協会も国際バレーボール協会への加入が認められ、強化の為に海外遠征が不可欠の機運となっていた。6人制を勉強するという大きな目的もあった。

谷口監督はこのアメリカ遠征のための長期休暇を当時の勤め先三洋石炭に申し出たが認められず、結局退職してその退職金も渡航費につき込む。そして実姉の友人で時の池田勇人総理夫人の力添えも受けて緒方竹虎副総理を後援会長に担ぎ出すことに成功



大倉俊彦さん(72歳)と谷口清さん(84歳)

皇太子殿下と記念写真

し、その直筆の紹介状をもって募金活動をしながら宮内庁宇佐美長官に直訴して皇太子と同じP・ウイルソン号への乗船を認めさせたという。

早大チームは全米各地でYMCAチームや各大学チームと対戦し、6人制24戦9勝14敗1分で全米選手権大学の部・第3位、9人制では15戦14勝1敗と大きな成果を上げた。

さて今度は帰国の費用が足りない。谷口監督は運輸省高官を動かし、日本へ帰る山下汽船、大同海運ら貨客船に分乗させて全員帰国させた。さらに両社の社長にかけあって結局船賃は寄付扱いで処理される、という政治力も発揮したという。

この後も6人制バレーボールの普及と東京オリンピック大会への強化に全国を飛び回り、日本バレーの世界進出の鍵は女子チームにありと力説、これが「東洋の魔女」の誕生までにつながっていく。

広島市段原の素封家に生を受けた清少年は、ひ弱でよくも県立中学に進学出来たものだと言われた。それが二中では陸上競技のハイジャンプで県の中学記録を出したのみならず二年生の時、応援に駆り出された第1回西日本少年排球大会で優勝してしまった。これからバレーボールと生涯の付き合いがはじまる。

二年生を留年した彼は四年生で早稲田大学へパスしたが、それを翻して何と二中へ復学している。この理由は同時に早大入りした長崎重芳、山口祚一郎、前田豊といった全日本級名選手の先輩たちから「一年早いゾ」と一喝されたから……ともいわれるが、強化され過ぎた早大に比べ、二中五年生に部員が足りず余りにも弱体化していたので、学籍も無くなっていた二中に敢えて戻った……これが本人の弁。そんなこんなが二中卒業回期が8回だったたり9回だったりするのだろうか。氏が世話役をかついでいた同期会「うましか会」が8・9回卒というのもこの辺にわけがあるうか。

平成元年に上梓された「広島二中排球部史」でのOBの寄稿で9回卒谷口氏は「排球は我が人生の一部で全部なり」と言い切っている。ついでながら、6、7期後輩となる15回卒業の田中正己氏、この人は在米日系二世だったが日本精神論者だった父君から日本で勉強して来いと昭和十年イヤイヤ日本に帰らされ、広島二中で大して興味のなかった排球部で谷口清先輩にさんざんシゴかれた、と述懐している。もともとその田中氏もその後の広島二中三年連続全国優勝で「オリンピックでいえば金メダルサーブを放ったのは紛れもなく小生なり」と胸を張っているのだから、やはりスポーツマンは素晴らしい。



谷口家祭壇にて

この「排球部史」では巻頭に日本バレーボール協会の松平康隆会長が「広島二中ほど近代日本バレーに大きく影響を与えた旧制中学はない」とし、功労者の名前として長崎重芳、前田豊、山口信之と並べて谷口清の各氏をあげている。

清氏はその社交性の豊かさから交友範囲も広く、早稲田創立者大隈一族にゆかりがある社交団体会員制「永楽倶楽部」のメンバーだった。この倶楽部は東京大手町の一角、重厚なビルの上階にあり、明治の鹿鳴館的な趣を留める大ホールだった。今の二二

中・観音芸陽会Ⅱ在京芸陽会Ⅱはこの場所を誕生の地としたのである、何回と続けられた設立準備会でも谷口氏はメンバーとして倶楽部に便宜を計らせた。そして昭和六十二年十一月二十六日に旗揚げ総会。在京同窓百二十名という予想外の大勢が初めて集ったこの席で谷口氏が閉会の挨拶に立ち、いつもながらのザックパランの調子で「私は二中に六年間おりました」と拍手を呼んだものだった。

その二年後の総会では、8回卒の山口信之氏から取り寄せた二中最古の応援歌と言われる「玉簫々の水流れ」のテープⅡ升田徳一先生(2回卒)吹き込みⅡを披露して一緒に歌ったりしている。

22回期が作っている会報「にいいい」が平成元年芸陽同窓に行ったアンケートに対して「自分の二中時代は前後の光輝ある連続全国制覇の中間的な暗黒時代であってそれなりに苦しんだ。その後早大で全日本に優勝できたりしたのもその時代の基礎があったからだと思う。浮かばれない頃のつましい努力というものの価値を今になって再評価し自己満足している。云々」と答えている。当時仕事としては早大先輩後輩の縁があつて大倉電気工業㈱の経営に常務取締役として参画していた。

芸陽会の常連である谷口五郎氏は二中13回期の卒業、一九九三年(平成五年)ニュージージランドで開かれた世界マスターズ水泳大会の七〇歳以上のメドレーリレーで世界新記録の金メダルを獲得した。この五郎氏は清氏の弟君、二中のスポーツ2枚看板の「排球」と「水泳」を正に兄弟で分け合っている形ではないか。

清氏の令息達もスポーツの血をひいた。早大30年振りの箱根駅伝優勝のメンバーだった長男は、90年のロンドンマラソンで2時間12分台の好記録を出すなど将来を囑望されていたが、残念なことに同年夏北海道で瀬古監督率いるエスピーチームが起こした

交通事故の犠牲となった。早大でラグビー部だった次男は文藝春秋出版局で書籍編集の傍ら、日本で6人しかいないラグビーの国際ライセンスを持ったレフリーとして世界中を飛び回っている。

ガンで奥方に先立たれて十数年、さらに事故で長男を失うなど辛い運命にもへこたれず、次男と二人きりの生活を続けていたが、寂しい素振りは全く見せず「女友達には不自由はしとらん」と何々大笑。一人で海外ツアーを楽しみ、特にマレーシアのペナがお気に入りだった。

在京芸陽会の創立功労者の一人であり、永楽倶楽部のあるビル改築に伴って日本青年館に定席が移った後も出席していたが、どうしたボタンのかけ違いか、ここ数年芸陽会には姿を見せなくなったのが残念でならない。

体力の衰えは止むを得ないとしても、体調不良をおして昨年の秋の広島における二中排球部OB会に出席した。「あれは旧友へのお別れのつもりだったのではないか」これは後輩の中谷(沖)一彦君(二中22期)元専売広島監督)の言葉である。

その年の暮れ、余りの苦しさ自ら救急車を呼んで聖マリアンナ医科大学病院に入院、再び川崎のわが家に帰ることは出来なかった。心筋梗塞の手術をしたが肺炎を起こし、年を越した一月十五日に永眠。三日後に横浜青葉区のセレモニーホール大成における葬儀では、二同期だった西亀芸陽会会長をはじめとした三百人にも及ぶ弔問客を前に、渡米早大チームの若い一員であり、その後も五十年にわたり公私とも親交を続けた大倉電気工業・大倉俊彦氏が「稲門バレーボール倶楽部・後輩」として切々と弔辞を述べて偉業を讃えた。

スポーツを愛し、スポーツに捧げた見事な八十五年の生涯であった。

深悼。



# 追悼

## 戦闘機乗りで活躍

故 永井 要氏

(一中4回卒)



前頁に9回卒の谷口清氏への惜別の文章を載せたが、この永井さんも谷口さん同様、在京芸陽会発足時の功労者のひとり。昭和六十二年十一月の旗揚げ総会では、企画の経緯を説明した後「紅顔の美少年の頃を思い出します。この会場には懐かしい校章もしつらえてあるし、校歌も流れています。記念すべき一夕であることを」と挨拶している(写真)。

戦時中は戦闘機乗りで活躍し、同窓会名簿では一時戦死扱いされたこともあるとか。軍人経歴から戦後公職追放になったが、語学力を生かして英語教師、港灣の輸出入エック業務、印刷会社の経営などに携わった。22回期の会報アンケートに「十年間の軍務にも戦後の困難時代にも耐え抜いた体力と精神力は凡々の二、五年間の生活のお陰だと思ふ」と答えている。総会への出席は大手町時代の僅か2回にとどまり、その後は夜は出歩かないようにしていると欠席の返事が届くようになっていた。平成八年から腎不全の透析を続け、昨平成十四年三月十五日永眠。享年八十九歳。合掌

## 死ぬまで同窓会皆勤を続けた

故 徳田 浩二氏

(二中7回卒)



在京芸陽会は昨年まで16回を数えたがこれにすべて出席した人は奥窪事務局長を別としてそんなにいるわけではない。しかし役員でもないのに昨年亡くなるまで毎回皆勤という、奇特というか、この同窓会をこの上なく愛した人がこの徳田さん。毎年毎年、同期ではほとんど一人ながらこの集いに出席することを楽しんで続けてきた。会のお陰で1期上の「ダンベエ」さん(原剛中氏)今は故人と付き合いが復活出来て喜んでいて。

昨年十月十一日の総会を前にして、体調が悪いのに「行きたい、行きたい」の思いからハガキを出すのを延ばしに延ばしていたが、とうとう「不参加」と書き込み、結局それを投函出来なかった。「あれが絶筆となりました。同窓の皆様には感謝しています」とは奥様の言葉。日新製鋼(株)をほぼ定年まで勤め上げたが、二十五年前から糖尿病と闘い、一時はその闘いぶりは医者から「優等生」と称される位だったとか。昨年入院をくり返したが尿毒症を起して九月二十五日永眠。八十八歳の米寿まであと三日だった。合掌

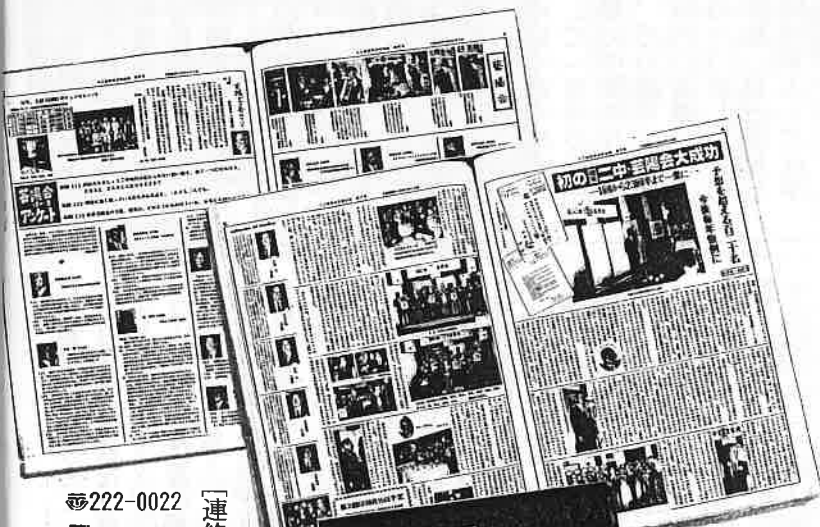
## 本誌のルーツ? 「会報仁いに伊」集大成 発行

二中22回期「仁に伊」が過去22年間にわたって毎年発行、今年で完結させた「会報に仁いに伊」のバックナンバー全巻を縮刷し集大成した一冊がこのほど完成しました。A4判、二二〇頁で予約を募っての限定出版。表紙はレザック紙に金箔捺し、制作者が自画自賛する程立派に仕上がっています。

22期の活動をメインにしているのは勿論ですが、在京芸陽会の創立総会、在京

同窓へのアンケート(左コピー)、母校創立七〇周年記念総会、カーブ応援などなど、今日までも紙面の許す限り在京芸陽会や県人会の報告も続けてきました。本誌の制作に当たってもこの資料、記録を全面的に頼りにしています。これ無くしては本誌も生まれておりません、いわば本誌のルーツ、濫觴とでもいえますようか。

もし同窓の方でご希望の向きがありましたら余部で応じられる筈。但し千円以上(送料)外野からは安過ぎる(との声)のカンパをお願いいたします。連絡は左記事務局まで。



222-0022  
TEL/FAX 045-402-2854  
「連絡先」 東京二二会事務局  
横浜市港北区篠原東二一五-八  
亀井 賢伍

# これ 最初で最後?



「あとがき」 〓 本誌を企画して 〓

松本 正 (二中22回期)

●今年も日比谷公会堂でのサマージャズ・フェスを観に行った。森寿男&ブルーコーツ、北村英治、宮間利之とニューハード、藤家虹二、ジョージ川口といった面々に、トリは原信夫とシャープス&フラッツというコンビからフルバンド。午後2時から夜8時過ぎまで六時間半にも及ぶ長丁場で十分に堪能させてくれる。回りの客を見れば、茶髪金髪の若者の姿はなく、若い方でせいぜい五六十代。歌舞伎とは違う、クラシックとも違う、ジャズといってもダンモではない、「スイング時代」への懐かしさを共有する同窓的な雰囲気でも云えようか、その意味では妙に居心地がよい。年に一回、今年で三十五年目を迎える行事だ。MCの行田よしおが「昔は楽屋では酒と女の話ばかりだったのが、このころは、ヤレどこそこの病院がいいとか、墓地を買ったヨ、なんて話ばかりで」と笑わせる。八十一歳になる宮間利之は曲の終わりにピョンと飛び上がるのだが、今年はその高さが低くなったように見える。ジョージ川口のバチ捌きは相変わらず見事だが、歩き方がヨタヨタしているのはわざとだろうか。ベギー葉山はほとんど寝たきりの根上淳の介護に苦勞している様も見せず健気に歌っていた。昔私が司会をした義弟の結婚式で演奏してくれたオッパチ大橋節夫は髪を不自然に黒く染めて若ぶっているのに、流石に声は昔と比べるのが辛い。彼の朋友笈田敏夫が体調不良で急な出演不能にガッカリしたが、その訃報を聞いたのはその二日後だった。これも四十年近い昔のことだが、恵比寿に当時私の勤めていたデイスプレイ会社の工房があり、その隣に劇団四季の

オンボロ稽古場があった。真っ赤なMGの石原慎太郎やら色々な連中が遊びに来ていた。その中にゲン(笈田)がいて聴くともなく耳に入るアカペラの歌声に、プロとは流石なもんだと感心したものだ。みんな歳をとるのは平等だ。ジョージ川口の倅など若い二代目が親の仕事を継いでいる例はあるが、聴く方の次の世代が同じようにこのジャンルの音楽への魅力を持ち続けてくれるだろうか。何だか我々の世代で終わるのではないかと感じられる。

牽強付会と自ら苦笑しつつ申そうならば、その点在京芸陽会は観音という後輩が継いでくれるようになって心強い。この会初代会長だった二中1期の高橋伝之助先輩は「在京の同窓会は二中のみに限って欲しい」と望んでおられたが、後輩の幹事役としては、これにだけは賛同致しかねた。(このままでは会の将来はない。何とか広島で実現したように、東京でも観音へ繋ぎたい)この宿願がここ数年で叶えられてきた。これが私の次の企画を育ててくれることになる。

ここまでがこの「あとがき」のマクラらしいから、この男の文章は矢張り張リクドイ。

●私マツモト・デザインが今年まで二十二年間にわたって作り続けてきた22回期の同期会報を今年22号をもって完結させた。二月広島同期会に出席した際、中国新聞から取材インタビューを受けた。同期の故堀山季之の記事を担当する文化部の記者が、何で広島同期会報を東京で作って来たのか?に興味を持ったのだろう。写真も何枚も撮られた。そういうこともあろうかと同期の友には「ポツ」になって

驚くなよ」と予防線を張っていたのが現実となった。恐らく「今後はどうするのか?」の問いに「在京の同窓全体の会報を作るつもりだ」と答えたのが気に入らなかつたのだろう。何だ広島同期会報にゃないのか、と。この企画は昨年の在京芸陽会の席で予告しておいた。「行く行くはこの同窓の中にある新聞社勤務の仲間の手に委ねることにまします」が、まず最初の「こんなモノは如何?」を作ってみます」と。それが今貴方が手にしているこの一冊なのです。

「同窓」というか細かい「ゆかりの糸」を頼りに、誰でも何でも言いたいことを残せる場を作れないかと考え、編集がタイトなペーパーよりも頁単位で調整できるマガジン方式をとってみました。

生業の隙間に、イザとりかかってみると、下見せのひな形段階から色々な意見が出て、制肘とまでは言わないまでも、一人で勝手に作ってきた同期会報とは次元が異なる。「そもそも会報の定義は奈辺にありや?」なんて難しいことになってきた。だからこそこの今回の試みはプレゼンテーションなのです。サンドバッグの如く叩かれるのは覚悟の上です。当初付けていた「会報」「第1号」の字句いずれも削りました。記事企画はまだ色々あるのですが、印刷屋に頼む費用の方はあるべくもなく、自前コピーに自前のホッチキス止め製本、回日もナイフで手切りという「手作り」です。いわゆる「3号雑誌」まで届くどころか、次号の約束、保証は出来ません。これが【最初で最後】になるか、今後の運命は「続ける」という声があるか如何にかかっているのです。

海のものとも山のものともわからないのに、寄稿や協力くださった諸兄諸姉、有り難うございました。断りなしにお名前やお写真を使わせていただいた方々、どうか趣旨をご理解賜るようお願いいたします。



# 玉萬壽醬油



風土が育んだ  
ほんもののおいしさを伝えます

- 全国醤油品評会 ■
- ◆ 昭和56年 食糧庁長官賞
  - ◆ " 61年 " "
  - ◆ " 63年 農林大臣賞
  - ◆ 平成10年 " "
  - ◆ " 12年 食糧庁長官賞

天保年間創業  
濱口醤油醸造場

濱口醤油醸造場 〒737-2211 広島県佐伯郡大柿町柿浦2080 TEL0823-57-2136 FAX0823-57-7122  
 商工会ホームページアドレス <http://www.ogaki.or.jp/shopm/hamaguti/>  
 [能美島に実家がある観音20回期・猪原陽子さん(旧姓濱口)提供]

[在京芸陽] 平成15年(2003)10月10日発行

企画制作 松本 正 《マツモト・デザイン》 (二中22回卒)

〒216-0001 川崎市宮前区野川30-8 携 090-9387-7770  
 TEL 044-751-2156  
 FAX 044-751-5205  
 Email matsumoto-design @ ezweb.ne.jp